

玩具自作の奨勵

東京女高師講師 藤 五代 策

私は、この夏休みに文部省や、大阪市や、女子大學の玩具講習會に出席しまして、子供の玩具は可成自身に製作せしめることの必要であることをお話しし、簡易で面白さうな玩具を三四十種位作らせました。

一體物を製作すると云ふことを精密に考へて見ますと、各方面に澤山の教育的價值が潜んで居ると思ひます。私の家のお隣に今年七歳になる藤田精一と云ふ可愛らしい男の子があります。至つて無邪氣で素直な性質ですから、私はいつも此の子を相手に色々、子供の心理状態を研究して居ります。ついで此の頃の事でしたが、私が手製の鶯の笛(竹製)を與へて吹き方を教へましたら、之れが何よりの大喜びで、寸時も手放さないうで吹いてゐました。夫から二三日経つてから、再私の許に參りまして、先生鶯の笛を今一つ作つて頂戴としきりに所望しますから、

よし作つて上げよう、縁側に出て、古傘の柄をとり出し、小鋸や切出小刀で、鶯笛の製作にとりかゝりました。然るに精一君は、外見もせずに一心不乱に笛の作り方を見てゐます。時々手を出して自分も作つて見たい氣持が満面に現はれて來ました。丁度晝食時になりましたので、女中が「精一様お飯ですからお歸り」と、再三迎ひに來ましたけれど精一君は笛が出來たら歸ると云つて遂々完成したのを戴いて鳴り方迄も試験した上で、「先生有りがたう」と、一禮して歸りました。夫から後と云ふものは、最初の笛は何處やらに置き忘れて後の製作した笛のみを嗜んで、ご飯のときは膳の上に、寝むるときは牀の下に、外に出るときは懷に容れて、何よりも大切に玩ぶのでございます。

私は精一君に單なる鶯笛一を作り與へたに付いて大なる教訓を與へられました。或人が、一錢の自作

玩具は、一圓の買ひ玩具よりも尊しと云はれたも尤なことであると感付いたのであります。彼の英國のリバプールの博物館長たるジョージ、デヨンソン氏の云はれたやうに、

「子供に高價な器械的な玩具を與へるのは誤つた親切盲目な愛情である。たゞ子供自身に組み立てる事の出来る範圍の、簡單な、ありふれた材料を與へさへすれば、子供はそこに何かを工夫して玩具を作るのである。女の子ならば、五六錢の人形と、古い布片をやるがよい。さうすると高價な著作を著せた人形よりも、もつと自然で且つ効果のある様に自分で工夫して面白く著作を著せるのである。之に反して高價な著作を著せたもの、即ち出來上つてゐる人形を與へると、彼等兒童の最も尊重すべき想像力を働かせる好機會を全く奪ひ去つて仕舞ふことになる。従つて工夫發明の才や、策略智謀の能を發展させる萌芽を摘み切つて仕舞ふ事となる」云々。

又バーター、エデン氏も同様の聲の許に玩具の自作を奨励してゐます。氏の主張は、

「製作すべき玩具の材料は、兒童各自に隨意のもの

を持ち來らしめ、且つ兒童各自の好む處のものを製作せしめ以て、兒童の個性を充分に發揮せしめねばならぬ。而して、製作中は教師は何等の指導をも與へず、兒童が考案に窮した時だけ、必要なる部分に向つて、助言を與へることとする。斯うすると、兒童が製作上の難關を切りぬけた時には、其顔に、誇り、安堵、歡喜の色が浮び、之がため

に其の製作に熱心の度を増し且如何なる難澁な製作でも、初めの一念で屹度貫徹せしめると云ふ信念を生ずるものである」。

以上兩氏の意見では從來の既成品となつてゐる玩具には大した價値はない、當初無意味の材料を手にし自分で種々工夫を凝らし心の限り根限り頭を絞り骨身惜まず働いて作り上げようとする其の經路にこそ眞の教育上の尊重すべき効果は存するものであると言はれて居ります。

再び精一君の例に戻りますが、精一君は此の鶯の笛が餘程好きとみえる。今度は先生に頼らず自分獨で之を作つて見やうと言ふ頼もしい希望を抱いたらしい。そこで母に迫つて竹を呉れよと所望する。母も相等教育ある人でしたから、早速書生に命じて

竹屋に連れ行き男竹や女竹や様々な竹を見させたので、精一君は始めて竹は非常に長くて幾種類でもあることが判つたらしい。其内から直径六七分の竹一本を買つて歸つた。今度は小鋸が欲しい、小刀が要ると云ふことになつた。再び書生は刃物屋に精一君を連れて行き適當な工具を買つた。こゝでも刃物屋には様々の刃物があることが判つたのでございます。夫から、書生を相手に笛を作り始めたが、大凡二時間もかゝて、やつとの事で、鶯の笛が出来上つた。(勿論精一君には鶯笛の作れよう筈はない、幸ひ書生が器用でしたから完成したのである)。

願ふに一の簡易なる物を作るにも材料の研究、工具の研究、製作品の研究等之れが爲めに心身の活動は大したものであります。物體に關する確かなる觀念や、工夫始の諸能力も、大部分は製作によつて收得されるものでございます。

殊に、玩具の如く、自作品が直に自分で玩ばれると云ふに至つては之れより愉快なことは他にあるまいと思はれます。買つた魚より釣つた魚が旨まいと云ふのも、無理からぬことです。近時教育上の新思潮は、作業主義、藝術主義、自動主義、發表主義、實用主義等數へ來れば十指を屈するも猶ほ足らざる次第であります。併し、是等の諸説を實行貫徹せしめる先鋒は、子供の時から自分の最も好愛する玩具を製作せしむるが最良法だと考へます。

○坊やはい子だ……

△お隣りに二人の子供が居ります。三つになる姉さんと、この六月生れたばかりの弟と。このごろの暑い午後、時計がチーンと一時をうつと、お隣りではれんれんよの競争が始まります、といふのはかうです。三つになる姉さんは、なか／＼活動家て晝寝が大きい、朝おきるから、晩れるまで、お母さんの腰巾着、時々はお母さんからお小言を頂きながらも、せつせと活動してゐます。せめて午後の一二時間をお母さんもおちつきたので姉さんの坊やをれかしつけます。「坊やはい子だれんれしなあ、坊やのお守は何處行つた：：：海山こえて里へ行つた。：：：里の土産何もらつた：：：でん／＼太鼓に笙の笛、坊やはい子だれんれしなあ……」。

れむくない姉さんの坊やは、なか／＼上下の眼蓋が仲よしになりません。とう／＼お母さんのこの口調をおぼえてしまいました。可愛らしい赤い襟襦のお蒲團に横になつた姉さんは、やがて頓狂な聲をはりあげて。「坊やはい：：：れんれしなあ：よい子だ：でんでんだいいこ：ちよりのふる：：：れんれしなあ……」。折角れてゐた弟の坊やが、この聲にびつくりして目をさましてなき出す。女中がとんで來て弟の坊やに「坊やはい子だれんれしなあ」とくりかへす。お母さんば姉さんの坊やの背をたゞきながら、

「本當に、れるんですつてば、赤ちやんがおきてしまつたぢやありませんか。困つた娘さんですれ。目をつぶるんですよ」と、また「坊やはい子だ」とうたひ出す。

太陽はキラ／＼と照つて世界は眞晝、人は活動の眞最中、こゝでは二人の坊やに二人の大人が「坊やはい子だ……」の競争で、母んさのソプラノと女中のバスと二重音になつて、それに大きい坊やの口眞似と、小さい坊やの泣聲とがまざつて、なか／＼の賑やかさ。とても眠の國にはゆかれさうもないやうです。(九・八三〇)